

アウトサイダー

② 性犯罪者を排除せず、治療する

【社会の既成の枠組みにとらわれない
信念で行動する人】

「昨日、父とホテルで寝た」。15年前、福井県病院で診察中だった精神医福井裕輝さん(44)は、

京都に、小学校高学年女児から電話が入った。ヨックで頭が真っ白になり、その後の診察は記憶にない。

女児は「誰かの声が聞こえる」などの幻聴があり、に凶暴な性格になるなど、解離性同一性障害(多人格)の症状が出ていた。身の人格を切り分け、特定の人格につらい記憶を封鎖することで発症するとされる。しかし、その「原因」分らないまま治療が続いていた。

電話で、謎は氷解した。親の性的虐待の影響は明らかだった。しかし父親は娘愛情を持って接して何が

興味は医学的ではないか」と言われた。京大医学部に入り直し、精神科医の道を選んだ。

1988年に京都大工学部に入ったが、ずっと人の脳や心理に引かれていた。ある日、心理学者の故河合準雄さんに相談し、「君の

強制わいせつを繰り返す少年の脳をMRI(磁気共鳴画像装置)で検査すると損傷があった。バイクで転倒して以降、性衝

動を制御できなくなっていた。幼少時の性的虐待が遠因で、性犯罪に至ったケースも多かった。少年たちの病理は見過ごされてい



診察の合間、子どもたちの声が響く公園を散歩する福井さん。性犯罪加害者を暴走させる背景へのアプローチこそ、被害者を減らす道だと信じる(東京都内)

「悪人の病理」向き合う

「加害者をなくさない」と、被害者もいなくならない。福井県の女児を診察した体験が重なった。

2010年、臨床心理士らと「性障害専門医療センター」(SOMEC)を都内で立ち上げた。痴漢、盗撮マニア、小児性愛者、ストーカー。世間に「悪人」と断罪されていた人たちを「病气」として治療する、国内では例のない試みだった。

SOMECでは、患者の性的嗜好を聞き取り、行動療法を施す。痴漢がやめられない人には「つり革に両手を置く」「バイク通勤に替える」など、少しずつ行動を変えさせる。性衝動が激しい人には薬物投与もする。設立以来、百数十人を治療し、性犯罪を犯した患者は5%未満だ。

また、活動が広く受け入れられているとは言えない。「死ね」などのメールは日常茶飯事。被害者支援団体が事務所へ抗議に押しかけたこともある。

日本の医療環境の遅れも歯がゆい。性犯罪者の治療手法が進んだ欧米とは格段の差だ。それでも理念に共感する医師が増え、昨年度にセンターの大阪支部ができた。10月は京都府警に招かれ、ストーカー問題で講演した。

自身も、発達障害の一つ、注意欠陥多動性障害(ADHD)を抱えて生きてきた。精神的な少数者に無関心でいたくない。「日本は『性欲は自分で律する』という考えが根強い。でも、やめられず苦しむ人に治療は必要」と話す。次の目標は、性の治療を保険医療として認めさせること。「潔癖」な世間の固定観念の扉をこじ開けていく。

(辻智也)